

このような形で、高山右近さんを通して、皆さんとご一緒できますことを感謝します。

さて、高山右近さんなんですよネ。高山右近兄（きょうだい）。今は、天国・400年前、当時の言い方でいいますなら、天のパライゾにおられるのですけれど、【高山右近の信仰に学ぶ】高山右近、もう少し広げますならば、今から400年前のキリシタン達。高山右近やキリシタン達の生き方や信仰から学んでいく時になれば、と思っております。

ところで、皆さんに質問です。

皆さんには、身近なところに、皆さんの信仰や生き方の手本となるような人が、おられるでしょうか。

もちろん、私たちは、「キリストに倣いて」イミタチオ・クリスチ、神にならう者・キリストに倣う者となりなさい。（エペソ人への手紙5章1節）と勧められています。私たちに内住（ないじゅう）しておってくださる聖霊なる神さまの働きによって、主と同じかたちに、少しずつ少しずつ変えられていくんですよ。

イミタチオ・クリスチ。キリストのイミテーション・キリストのコピーと言われる位にまでなるようにと、勧められています。

それと共に、キリストに見ならっている人たちを見ならいなさいとも、聖書はすすめていますよ。

・私（パウロ）がキリストを見ならっているように、あなたがたも私（パウロ）を見ならってください。（コリント第一 11:1）

・私（パウロ）を見ならう者になってください。また、私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。

・私たちを見ならうようにと、身をもってあなた方に、模範を示したのです。

（テサロニケ第二 3：9） —— とも言っています。

「高山右近研究」をよくなさっている、埼玉県春日部福音自由教会の高橋敏夫牧師ですが、3冊の本を書いておられます。「武将高山右近の信仰と茶の湯」「茶の湯の心で聖書を読めば」、そしてもう一冊「キリシタン大名 高山右近を追え！」 この3冊の本を書いておられる牧師です

が、このように言っておられます。

「私の大好きな高山右近。多分今生きておられたら、“高山右近先生”と言うのかな？」

私が高山右近さんにお会いしたのは——自分のえがくクリスチャン像を明確にしていきたい。だれか、自分のクリスチャン生活のモデルにする人はいないか。そういう思いで、あたりを見わたしたんですね。

ところが、常に短し、たすきに長し。どうも違う。

この人も違う。この人も違う。この人も違う。この人でもない。

そしたら、歴史の中で、へえ~~~~、そんな人がいたんだ！ というのが、高山右近だったのです。

同じように日本人として生まれ、同じように、この日本の国の中に育って

なんと、**高山右近**という人がいたんですね。それだけで、感動してしまいましたよ。」

高橋敏夫牧師の言葉ですが、私は高橋牧師は、現在、「高山右近研究」の世界ナンバー 2（ツ一）の方だと思っているのですが、「高山右近研究」の世界ナンバー 1 は、金沢の殉愛キリスト教会の**山縣 実牧師**です。

山縣先生は、次のように言っておられます。

「右近研究の究極——それは、単なる研究で終わるのではなく、右近の心——右近の神様に向けた心の動き、物の考え方、見えない内面性。右近を形成した精神にかたどって、**今を生きる右近！** そのように言われる人になること。又、そういう人を生み出してゆくこと。

右近の生き写し。現代の右近となること。それは、とりもなおさず、もう一人のキリストとなること、なのです。」

そのように、おっしゃっておられます。

イエス・キリストを見ならって歩いていった、使徒パウロ。

そのようなパウロを見ならって歩いていった、デモテやテトスやシラスやピレモンなど、多くの人たち。

そういう人たちに、目を留めるように、そういう人たちを手本にし、模範にして歩いていくようにと、パウロはすすめています。

主イエス・キリストは、私たちのなっていくべき完全な手本であり、模範ですが、私たちに、より近い、身近な手本・模範として、今回は、高山右近にしばらくの時、目を向けてみたいと思います。

高山右近は、1552 年に、摂津の国、現在の大阪府、豊能町の高山で生まれました。そして、1615 年、フィリピンのマニラで、63 歳で、天に召されていきました。

今から、約 400 年前の人です。

時代で言いますと、室町時代から、安土桃山時代、そして江戸時代のはじめ頃まで。いわゆる「戦国時代」を生きぬいてきた人です。

織田信長には、信任・信用されていました。

豊臣秀吉にも信頼されていましたが、「伴天連追放令」という法令を出して、「さあ、右近。私の方をとるのか。神・デウスの方をとるのか。」と秀吉に迫られましたが、迷うことなく、聖書のことは通り、「人というものは、たとい全世界を手に入れたとしても、自分の魂をなくしてしまったら、何のよいことがありましようか。」

そのように言って、神・信仰の方を選びとり、その結果、名誉も、地位も財産も、すべてを捨て去りました。

徳川家康には、「右近の部下の千人は、ほかのものの、一万人よりも、すぐれている。」そのように言われて、その実力・影響力を評価されていました。

忠実なクリスチャンでした。

実力のある武将・侍大将で、キリシタン大名と言われていました。

高槻城の城主として、12 年間をすごしました。21 歳～33 歳までの 12 年間です。

この間（かん）、キリシタン大名として、キリスト信仰に基づいた生き方、そして、町づくりをすすめてこられました。

高槻につづいて、明石・船上城（ふなげじょう）の城主として、2 年間をすごしました。

城造りの名人でした。

高槻城、明石船上城、前田利家に招かれて加賀百万石・金沢に移ってからは、金沢城の修築・改築、二代目の前田利長の代になって、富山の高岡城を建てる時、「縄張り」といいまして、設計や監督をしたのも、高山右近でした。

「茶道」、お茶の道。右近は、茶の湯・お茶の第一人者でもありました。

「千利休」といえば、現在も、表千家・裏千家・武者小路千家の「三千家」の形で、延々とつづいてきている茶道の大家ですが、その千利休の直弟子といわれる人たちが7人おられて、「利休七哲」と呼ばれていますが、高山右近はその「利休七哲」の一人ですし、7人の中でも、「利休極上一の弟子也」と言われているほどです。

皆さんは、国宝になっています、茶室の「待庵」(たいあん)のことはご存じでしょうか。

JR の高槻駅の2つ、京都寄りの駅が、山崎合戦のあった山崎駅なのですが、その山崎駅のすぐ前に、国宝の茶室「待庵」があります。

千利休がかかわった茶室で、唯一、今の世に残っているものです。黒を中心とした荒壁仕上げで、2畳敷きという、極限の広さの茶室空間で、利休が追求した「わび茶」の精神を見事に表現したものです。

実は、千利休が「待庵」を建てる時、丸木を準備した高山右近に対する、利休・直筆のお礼状が残されています。

「丸木六本、仰せ付けられ候内、一本、用に立ち申し候。大慶、此の事に候。相残るも、別に、用に立ち申すべく候」

というのですが、利休の「わび茶」の心をよく理解し、右近が準備した六本の丸木の中に、利休の思いにピッタリのものが一本あったようで、大慶この事に候。「大喜びする」というのは、この事をいうのだろう、とまで言って、右近に感謝しているんですね。

このように、高山右近は、戦国武将・キリシタン大名・築城の名手、そして、茶の湯の名手でもありました。

これら、いずれの面でも、すぐれた働きをされたわけですが、今回は、特に、キリシタン大名・キリシタンとしての高山右近にスポットをあててみたいと思います。

まずは、高山右近が「**祈りの人**」だったということから見ていきましょう。

イエス・キリストご自身、朝早く、まだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。—— とあります。

早天の祈り、**朝祷**をささげておられました。

高山右近さんは、どうだったのでしょうか。実は、高山右近は、熱心で、忠実な、朝早く、祈りをささげるメンバーの一人だったのですよ。

ルイス・フロイスという宣教師が、「**日本史**」という本の中で、次のように書き記しています。「通常、雨・雪・寒さ・暑さを問わず、教会に最初に姿を見せるのは、きまって、ダリオとその息子たち（右近のお父さんの**ダリオ飛騨守**と、右近さんたち）であり、それは、主日・祝日も、平日も同じことであった。」 そのように記しています。

それでは、皆さんを、400 年前の、朝祷・朝の祈りがささげられている、高槻城内にあった教会に、案内させていただきます。

右近さんが、高槻城主になりましたのは、天正元年（1573 年）のことですが、その翌年の天正 2 年（1574 年）に、高槻城内に、教会堂が新築されました。

朝早く、カラン、カラン、カラン・・・ 鐘が鳴り渡ります。

その鐘の音を合図にして、キリシタン達が次々と、教会堂に集まってきます。

雨の日も、風の日も、寒く、雪が降っている日でも、まっさきに、一番に、教会堂にやってくるのは、だれだったのでしょうか。それは、高槻城主・高山ジュスト右近と、右近のお父さんの、高山ダリオ飛騨守の親子だったのです。

彼らが、床（ゆか）の上にひざまずいて、声高らかに、「**主の祈り**」（**パアテル・ノステル**）を祈っている声が聞こえてきます。

その当時の言葉のままで、祈ってみることにしましょう。皆さんも、400 年前のキリシタンになったつもりで、いっしょに心を合わせて、祈っていただければと思います。それでは、祈りましょう。

【**パアテル・ノステル**】（主の祈り）

天にまします、われらが御（おん）おや

御名（みな）を、たっとまれたまへ。

御代（みよ）、きたりたまへ。

天において、おぼしめすまなるとく、

地においても、あらせたまへ。

われらが、日々（にちにち）の、御やしないを、

今日（こんにち）、われらにあたえたまへ。

われら、人にゆるし申すごとく、

われらがとがを、ゆるしたまへ。

われらを、テンタサン（誘惑）に、

はなし玉ふ事なかれ。

われらを、凶悪より、のがしたまへ。 **アーメン**

400 年前の、キリシタン達は、「主の祈り」をこのように祈っておりました。

彼らは、早朝、教会堂に来ますと、ひざまずいて、「パアテル・ノステル」（主の祈り）を 5 回、くり返して祈りました。つづいて、「天使祝詞」（アベマリヤ）の祈りを祈りました。更に、各人が、それぞれの祈りを続けて、祈っていきました。

来る朝ごとに、いつものように、祈りの家に共につどいて、主への薫香・祈り、当時のことばでいえば「**オラショ**」を、主なる神・デウスにささげ続けていったのです。

実は、「朝祷」だけではありませんでしたよ。「**夕祷**」・夕べの祈りも、熱心に、忠実に、ささげておりました。

こうした、毎日の、毎朝・毎夕の、へりくだった、忠実な祈り、**朝祷・夕祷**に答える形で、ご聖霊が働かれ、みわざをなされていったのです。

聖霊なる神による、リバイバルのわざがなされていったのです。

教会が新築されて、その 3 年後の 1577 年・天正 5 年には、1 年間に約 4 千名の人々が洗礼を受けました。その後は、年ごとにキリシタンの数は増えつづけていって、2 年後の天正 7 年には、2 倍の 8 千人になりました。

その翌年（とし）の天正 8 年には、更に 6 千人増えて、1 万 4 千人になりました。

4 千人から 8 千人、1 万 4 千人と、年ごとに増えていって、天正 9 年（1581 年）には、前の年より更に 4 千人増えて、1 万 8 千人。領民の人口、2 万 5 千人のうち、1 万 8 千人。72%。

10 人のうち 7 人以上がキリシタンになっていった、キリストの弟子に加えられていったというのです。

まさに、新約聖書の「使徒行伝」に記されている記述そのままの姿ですよネ。

高山右近さんが高槻城主だった、今から 430 年ほど前の高槻でも、聖霊による、大いなるワザ、聖書の記述そのままの、リバイバルのわざがなされていったのです。

毎日、人々が救われていきました。家族単位で救われていきました。そして、バプテスマ（洗礼）を受けていきました。

すべて、聖霊なる神の働きです。

「使徒行伝」・「使徒の働き」の 2 章の最後、46 節・47 節のみことばを思い起こしておきたいとします。次のように記されています。

「毎日、心を一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びとまごころをもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。

主も、毎日、救われる人々を仲間に加えてくださった。」 —— とあります。

毎日の、高山右近さんたちの、毎朝・毎夕の、へりくだった、忠実な祈り、朝祷・夕祷に答える形で、ご聖霊が働かれ、みわざをなされていったのです。

聖霊なる神によるリバイバルのわざが、なされていったのです。

そして、多くの人たち・領民たちがキリシタンになっていきました。

そして、救われ、生まれ変わったキリシタン達は、聖書から教えられた通りのみことばの実践、愛の実践を、単純に、Simple に、まっすぐに、Straight に、霊的に、Spiritual に、すすめていったのです。

キリスト教の中心・本質は、何でしょうか。それは、「愛」ですよネ。「愛の実践」です。

いつまでも残るものは、「信仰」と「希望」と「愛」。その中で一番すぐれているものは、「愛」です。

400 年前の、当時の言葉では、「愛」ということばは、別のイミで使われていましたし、キリスト教・聖書でいう「愛」とは全然違うものでしたから、宣教師たちは、別の日本語に翻訳しま

した。今でいう「愛」は、「**ご大切**」ということばに訳しました。

そして、「愛する」という動詞は、「**大切に思う**」ということばに訳しました。

時は戦国の世です。人々は、いろんな形で、「十戒」を平気で犯すようなことをやっていたような社会であったわけですが、そのような中で、救われ、信仰をもったキリシタン達は、打って変わったような、以前とは全く別人のようになっていったのです。

神・デウス、そしてキリストを**ご大切に**し、**大切に**思い、その同じ思いで、周りにいる隣り人（となりびと）を、キリストだと思って、**大切に**思い、**大切に**していったのです。愛を、聖書のみことば通りに実践していったのです。

高山右近やキリシタン達は、「**祈りの人**」でありましたが、「**みことばの人**」でもありました。それも、聞くだけの者ではなく、Simple に、Straight に、実践していったのです。

当時は勿論、まだ「聖書」は、礼拝に用いる個所が、部分的に訳されているだけで、聖書のほとんどは訳されてはいません。又、訳されているものでも、キリシタン達のほとんどは、学校があったわけではありませんから、読むことができません。

しかし、キリシタン達は、聖書の真理・教理を、しっかり教えられていたのです。

宣教師たちも、聖書はそうすぐに翻訳できるものではありませんから、大切にしましたのは、キリスト教教理、聖書の教理をしっかり教えることでした。

「**ドチリナ・キリシタン**」という教理問答書が、一番に翻訳されましたし、それらを用いて、聖書の真理をしっかり教えていったのです。

デウスとは？ 三位一体とは？ デウスの恵みとは？ キリシタンとは？ パアテル・ノステル（主の祈り）のこと、ケレド（使徒信条）のこと、ゑけれじゃ（教会）とは？ オラショ（祈り）とは？

こうした、すべてのことを問答形式で、わかりやすく教えていきましたよ。

ですから、キリシタン達は、文字が読めなくても、救われて何年もたたない時であっても、キリスト教の教え、聖書の真理について、しっかりしたものをもっていましたし、又語っていくことができたのです。

先ほど出てきました、フロイス神父が記した「日本史」という本の中に、次のようなことが記されています。

最近キリシタンになったばかりの、ディオゴというキリシタンが、松永弾正という人に訴えたことがあって、訪ねてきます。その時、応対したのが、結城山城守という学識のある人物だったのです。

いわば、京都大学の学長に用件があって、すぐには直接会えないので、まず、京都大学の教授と会っていると思ってください。

結城さんは、ディオゴともう一人いっしょに来た2人が、キリシタンであることがわかったので、たずねるんです。

「松永弾正さまは、宣教師たちを、京の都や周辺・五畿内から追放し、教会も没収するつもりであるが、そのことを知っているか？」

ディオゴは答えます。

「万事叶い給うデウスの御許し、御とがめあらずんば、いかなることも全世界にて起こり得ることなし。」 デウスさまのおゆるしがなければ、どんなことも起こりません！

結城「デウスとは何ぞや？」

ディオゴ「デウスとは、われらキリシタンが拝み、たっとみ奉る、天と地の御主（おんあるじ）で、今の世のみならず、後（のち）の世においても、最上の高いご支配をなされ、人類の救い主、万物の御（おん）作者、世界、並びに見えるもの、見えざるもの、すべての造物者（つくりぬし）である。」 そのように答えます。

結城・京都大学教授は、この名答に、驚歎の色を示し（びっくりしてしまって）、これに答えるべき言葉を知りませんでした。しかし、敗北を認めてしまっただけではないと思って、話を自分の専門のこと（人間の靈魂の世界のこと）に移していったのです。

ディオゴ達は、「自分たちは、新しく信仰をもったばかりで、宗教論議をたたかわす柄（がら）ではありませんから。」と弁明しながら、それでも精一杯のことを答えていきました。

結城氏のすべての質問や疑問に対して、満足すべき答えが返ってきましたので、結城氏は、ますますびっくりしてしまいました。

そして、終（つい）にこのように言ったと言うのです。

「俗人にして、家庭をもち、ごく最近キリシタンになったばかりの汝らにして、わが問いにかくも、適切に答うるにおいては、予がもし、その本源（本当のみなもと）より汲みとり得たらんには、いかばかりならん。」 このように叫んだというのです。

そうして、結城氏は、**ビレラ**という宣教師宛に、一通の手紙を書き、「奈良まで来て、キリシタンの教えを授けてくださるよう」と依頼して、ディオゴとその従者に届けてくれるように頼んだのです。

その後、結城山城守はキリシタンになって、ビレラ神父から、洗礼をさずけられています。

このように、救われて、キリシタンになってまもないディオゴたちが、聖書の真理をはっきり語ることができたのは、「**ドチリナ・キリシタン**」 キリスト教の教理の学びが大切にされ、学んでいたからなんですよ。

私たち、現代のクリスチャンたちは、どうでしょうか？

いつでも、自由に聖書を読むことができます。聖書のみことばについて、いっぱい聞いています。それなのに、聖書の教理について、案外弱いと言えるのかもしれません。

あの、宗教改革者であった**マルチン・ルター**も、**ジョン・カルヴァン**も、教理の学びが大切であるということがわかっていましたから、**ルター**は2つの教理問答書「大教理問答」と「小教理問答」の2冊の本を書きあわしています。

カルヴァンは、「ジュネーヴ教会・信仰問答」という本を書き著しています。

そして、ルターもカルヴァンも、それぞれ、多くの質問に対して、それに答える形で、聖書の教理をわかりやすく教えています。

400年前のキリシタン達は、時は戦国の世で、「十戒」を平気で犯すようなことが、普通に行われていた社会の中であって、救われ、信仰をもって、打って変わったような、以前とは全く別人のようになっていったのです。

- ・ 4人の妻や側室がいた武将は、一人を残して、他の3人と別れていきました。
- ・ 寒さにふるえている兵士がいたら、自分のキモノをぬいで与えました。
- ・ 戦さのために、夫を亡くした妻には、配慮が与えられました。 等々々。

皆さんは、高山右近が葬儀の時に棺（ひつぎ）をかついだという話を聞かれて、知っておられるかもしれません。

貧しい人の葬儀の時に、高槻城主である高山右近自身が、お父さんのダリオ飛騨守といっしょに、棺をかつぐということをしました。

当時、そのようなことは、聖（聖書の「聖」と書いて、ヒジリというのですが）、聖（ひじり）といわれて、サベツされていた人たちの仕事だったのですが、それを、城主自らがしていったのです。

時は、戦国時代のまっただ中です。殿様自身がそんなことをするなどということは、ありえないことです。織田信長や豊臣秀吉、徳川家康がそういうことをするか、どうか、考えてみてください。ありえないことです。

しかし、右近さんは、何も特別なことをしたわけではないのです。

一人のクリシタンとして、亡くなった人をキリストだと思って、「マタイの福音書」25章の、ご大切の教え・愛の教えを実践しただけのことだったのです。

「マタイの福音書」25章には、どのようなことが記されているでしょうか？

主イエス・キリストが再臨されて、さばきの座につかれます。そして、自分の右側にいる者たちに言われます。

「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。

あなたがたは、わたしが空腹であった時、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていた時、わたしに飲ませ、わたしが旅人であった時、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え・・・」 という風に、続いていきますよネ。

すると、そう言われた人たちが答えて言います。

「主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ・・・ということをしましたか。」

主の答えは、こうでしたよネ。

「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしのきょうだい達、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」

イエス・キリストが、このようにして、互いに愛し合いなさい、と言って語られたことを、400年前のキリシタン達は、「慈悲の所作・ミゼリコルジアの行ない」として、祈り・オラショとして祈り、唱和しておりました。

人に対して、慈悲（ミゼリコルジア）の心をもってなすべき行ないは、14 あります。そのいくつかを紹介してみると、

- 一つ、 飢えた者に食を与える事。（食べる物がない人たちに食べ物を与える事。）
- 二つ、 かつしたる人に、飲み物を与える事。（のどがかわいている人に、飲み物を・・・）
- 三つ、 はだをかくしかぬる者に衣類を与える事。（着る物がなくてこまっている人に・・・）
- 四つ、 病人と牢者（牢にとらわれている人）を、いたわり見舞う事。
-

という風に、続いていきまして、

- 七つ、 人の死がいを納むる事、これなり。
- とあります。

高槻城主である高山右近が、貧しい人の棺をかついだというのも、実は、この慈悲の所作・ミゼリコルジアの行ないの具体的な実践を、右近さんは忠実になした、ということだったのです。

でも、このことは、当時の日本の、戦国の世にあっては、考えられないほどの、トテツもないことだったのです。

京都にある、ある大学のお坊さんの先生は、このことについてたずねられて、
「城主だった高山右近の、こんな姿を領民が見たら、何も、キリスト教を押しつけられなくても、信仰をもつようになっていったとしても、それは当然のことだったと思いますよ。」
そのように答えておられます。

このような、ご大切の実践・愛の実践を、高山右近だけではなくて、お父さんの飛騨守も、細川ガラシアも、すべてのキリシタン達が、まわりが殺バツとした戦国の時代に、又、いつ命をなくすことになるかわからない中で、天国・パライズを思いながら、やっていったのです。実践していったのです。

そして、主・デウスも、毎日、救われる人々を、どんどん仲間に加えていってくださったのです。

「祈りの人・高山右近」「みことばの人・高山右近」について、「宣教の人・高山右近」ということについて、みていきたいと思います。

カトリック教会の皆さんが、今、高山右近が「福者」になるようにと、列福の運動をされていますが、高山右近に関して、祈っておられる祈りを紹介しておきましょう。

福者に列する、列福ということについては、プロテスタントの教会には、直接関係のないことです。その部分の祈りは、省略させていただきますが、このような祈りです。

すべての人の救いを望まれる神よ。

ジュスト高山右近は、「全世界に行って、福音をのべ伝えなさい。」というキリストのことばにこたえ、苦しむ人を支え、困難のうちにある人を助け、あなたへの愛をあかししました。

また、世の権力に屈することなく、福音に忠実に従う道を選び、すべての地位と名誉を捨て、幾多の困難をすすんで受け入れ、ついには異国へ追放されました。

このように、あなたはジュスト高山右近をとおして、すべての人に仕える者の姿を示してくださいました。

父である神よ。

現代に生きるわたしたちが、あなたの忠実なしもべ・ジュスト高山右近にならって、この世の力や誘惑に惑わされることなく生き、み名を知らない人びとに福音をあかしできるよう、ゆるぎない信仰と勇気で満たしてください。

わたしたちの主イエス・キリストによって。

アーメン

このような祈りなのですが、高山右近の生き方、信仰が見事に言い表されていて、私たち自身の祈りとしても、そのまま祈ることができるものではないかと、思います。

「父である神よ。現代に生きるわたしたちが、あなたの忠実なしもべ・ジュスト高山右近にならって、この世の力や誘惑に惑わされることなく生き、み名を知らない人びとに福音をあかしできるよう、ゆるぎない信仰と勇気で満たしてください。」

高山右近が、高槻城主だった頃の、高槻のことは、すでに話させていただきました。

高山右近やお父さんのダリオ飛騨守、そして多くのクリシタン達の祈りやご大切の実践・愛の

実践、あかしの生活を通して、ご聖霊がともに働かれて、領民2万5千人の内、1万8千人、72%。10人中7人以上の人たちが、救われて、キリシタンになっていきました。

本能寺の変で、織田信長が倒され、山崎合戦、清洲会議とつづいて、羽柴秀吉が天下をとりま
す。

その2年後の1583年に、大坂城が築城されます。そしてその近くの、天満橋の辺りに、ゆる
されて、大坂教会が建てられます。

その大坂教会のそばに、高山右近は一軒の家を建てて、その家や、大坂教会を拠点にして、高
山右近は、同僚の武将たち、あるいはその家臣たちに、熱心に福音を伝えていきます。

先に紹介しました、ルイス・フロイス神父は、次のように記しています。

「羽柴秀吉殿の臣下には、日本の宗教に通じていて、はなはだ雄弁な人が多いけれど、ジュスト
右近が語る際に、之に反対する者はいない。なぜかという、右近が語る場所は、言行一致し
ていて、その模範的品行の故であって、デウスの恩寵・恵みが共にあって、一同を満足させてい
る。」 —— という風に記されているのですネ。

・秀吉が最も寵愛し、信用していた武士が救われて、洗礼を受け、改宗後はそれまでと、打って
変わった生活をしていきました。

・更に、秀吉の寵愛していた武士で、12人の若者がキリシタンになりました。

・近江の国・2万5千石の大名・牧村政治がキリシタンになり、洗礼を受けました。洗礼後、彼
は別人のようになって、4人の、夫人や側室がいたのですが、最初に結婚した一人だけを残して、
他の者を去らせて、不道德な生活・悪習慣から、はなれていきました。

・大坂教会で、最初の8か月間で、約50人が洗礼を受けました。その中には多数の武士がいま
した。

・秀吉のもとで、第一級の領主であった蒲生氏郷（伊勢25万石）が、右近の励ましとすすめに
よって信仰をもち、洗礼を受けていきました。

・大物の救いがつづいていきますが、秀吉のもとで、大きな働きをしていた、黒田官兵衛孝高（よ
したか・播磨6万石）がキリシタンになり、洗礼を受けていきました。

最初に、キリシタン・小西行長が黒田孝高にすすめをし、高山右近と蒲生氏郷が、彼を洗礼へ
と導きました。

黒田シモン孝高については、次のように記されています。

「右近が数多くの霊的な子どもを生みだした中で、黒田孝高ほど、多数の武士を教会に導いた者はいない。」 そのように記されています。

・京の都の医師であって、日本全国で最も有名な医師であった曲直瀬道三（まがせ どうさん）という人がキリシタンになり、洗礼を受けていきました。

・市橋兵吉 美濃・2万石がキリシタンになり、洗礼を受けていきます。

・瀬田左馬丞 近江1万2千石がキリシタンになり、洗礼を受けていきます。

・その他、多数の武士達が、大坂教会で洗礼を受け、合計しますと、200人以上であったと伝えられています。

宣教師報告が、定期的に、ローマに送られていましたが、その中で、右近のことを次のように記しています。

「**ジュスト**右近殿は、その毎日の徳や生活の光により、主は、洗礼を受けていった武士達を照らしたもうたといえます。即ち、右近殿の語るところ、及びその勧めによって、彼らは、教会に行って説教を聴くようにと、感動させられたのです。

右近殿は、すべての人を、彼らの創造者・デウスの認識へ導く方法・道は、どのようにして見出すことができるだろうか、ということを、一番に考えています。

そして、右近殿は、デウスのことについて、甚だ、よく、且つ、見事に語っていて、この点で、彼にまさる者はいません。」 そのように記しています。

さて、いよいよ、右近さんの地上での最期の時が、近づいてまいりました。

1614年（慶長19年）、徳川幕府・徳川家康によって、キリシタン「**大禁教令**」が出されます。

高山右近は、加賀の地におりました。高槻には、城主として12年間いましたが、加賀の地には、2倍以上の26年間、前田利家・その子の利長たちに仕えて、金沢にいたこととなります。その金沢の地をも、去ることとなります。

1614年、右近一家、右近・ジュスタ夫妻、娘の横山ルチア、今は亡き長男・十次郎の子どもである孫5人。

そして、よき信仰の友であった内藤如安一家などと共に、真冬の金沢を、捕らわれの姿で出発

し、雪でおおわれたけわしい山々を越え、常に不自由で、欠乏の長崎までの旅を続けていきます。

そして、**国外追放！** 1614年11月8日、長崎出帆。小型の老朽船に、100名以上がつめこまれて、多すぎる乗員。

暴風、逆風に悩まされ、普通の船で、順風ならば10日ほどで行けるところを、実に34日もかかって、フィリピンのルソン島・**マニラ**に到着します。

右近たちが、信仰ゆえに、祖国・日本を追放されてくるという話は、すでに伝えられていたもので、**総督のファン・デ・シルバ**をはじめ、市民たちは、一行を敬意をもって、大歓迎しました。

右近たち一行は、上陸後、総督官邸に入り、丁重な歓迎を受けます。そして、その後、護衛兵付きの総督の馬車で、宿舎に向かう途中、**「マニラ大聖堂」**（マニラ・カテドラル）そして、**「サン・オーガスチン教会」**で馬車を降り、祈りをささげました。

今も、400年前に、右近たちが祈りをささげた「サン・オーガスチン教会」が、そのまま残されていまして、毎週、今も、礼拝・ミサがささげられています。

・そして、旧・日本人居留地であったパコ駅前の、**ディラオ広場「比日友好公園」**には、高槻の城跡公園にある**「高山右近像」**と同じものが建てられています。

・高槻市とマニラ市とは、高山右近との関係で、姉妹都市になっています。

真冬の金沢を、捕らわれの姿で出発し、雪でおおわれたけわしい山々を越え、常に不自由で、欠乏の長崎までの旅。つづく狭い船での、長くて、苦しい航海。

肉体的には、右近は、限界に来ていたようです。

マニラに到着後、40日ほどで、ひどい熱病にかかります。

モレホン神父や、若い5人の孫たち、遺された者たちに対する、別れの言葉・**遺言**は感動的です。

● モレホン神父に対して

「パーデレ。私はまもなく召されるとと思いますが、神がそれを希望し給うのですから、私は喜び慰められています。今ほど幸せな時が、これまでにあったでしょうか。

私は、妻や娘・孫たちについては、何も心配してはいません。彼らと私は、キリストのために

追放されてここに来ましたが、彼らが私について、この土地まで来てくれた愛情に、深く感謝しています。

神のために、このような境遇になったのですから、神は、彼らにとって、真実の父となり給うでしょう。」

● 先に天に召されている長男・ジョアン十次郎の子ども達（若い5人の孫たち）や、遺された者たちに対しては

「泣いてはいけない。お前たちにとって、私が必要だとでも思っているのか。考え違いに気づきなさい。お前たちの身の上は、神がお引き受け下さるのだ。

今まであったことを考えてみなさい。私たちは、苦しむために外国へ来たと思っていたのに、自分たちの祖国より良い所にいて、自分たちの生まれた所よりも恵まれ、愛され、栄誉を与えられているではないか。

これは、神の御業（みわざ）であり、これは決して無くなることはなく、私の召された後（あと）も、かえって増していくだろう。

お前たちは、**りっぱなキリシタンになって**、聖なる教会やその教役者（きょうえきしゃ）であるパーデレ方の教えに従順でありなさい。

もしこのことに背くならば、勘当し、子や孫、あるいは親族とは認めない。」

数日後、病状は悪化します。そして、

「わが魂（アニマ）は、天地万物の御（ご）作者なる御（おん）主を、ひたすら慕いたてまつる。」
そのように繰り返し、主イエス・キリストの御名（みな）をとなえながら、**1615年2月3日**。
静かに、天に召されていったのでした。

63歳。洗礼を受けてから、50年の生涯でした。

以上。

「**高山右近の信仰に学ぶ**」 最後まで、熱心にお読みくださって、ありがとうございます。

